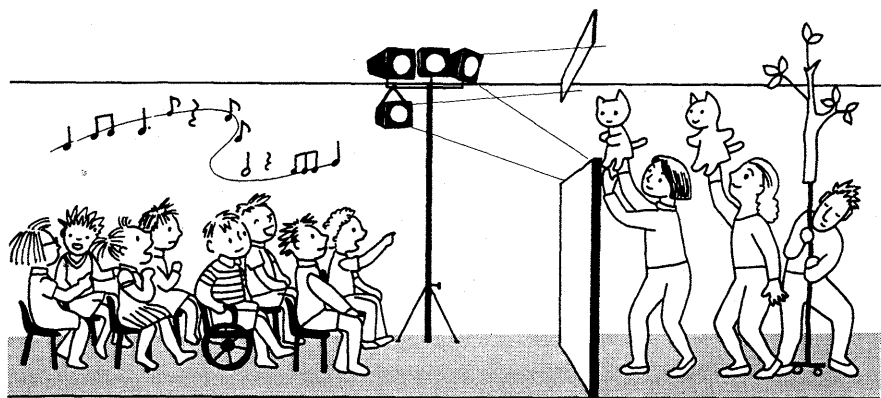


# ここから先は子ども席

— 観劇会周辺 —

永野 むつみ



カット 山根 裕子 (ひぽぽたあむ)

困ったあいさつ

私たちひぼぼたあむの人形劇は、ほとんどの場合、あいさつなしで始まる。そのかわりというわけでもないが、主催者に会の始まりのあいさつと、必要があれば会の主旨や簡単な劇団の紹介をしてもらい、劇のオープニングへとつないでいただく。

言って欲しいこと、言わないで欲しいこと、使って欲しくない表現など、失礼を承知で率直に伝える。しかし、開演前のあわただしさやおっくうな気分から、この打ち合わせを怠ると、始まってからアララということがある。たとえばこんな具合だ。

よくある「あいさつ」

「みなさん、おはようございます。あら、元気がないわね。もう一度一緒に、お・は・よ・う・ご・ざ・い・ま・あ・す。はい。今日は、待ちに待った人形劇の日です。楽しみにしていた人。はーい。はい、静かに。シーン。Aちゃん、ちゃんと座っ

て。ちゃんと座ってみられない人には出て行ってもらいます。今日は、人形劇のお兄さんやお姉さんが、朝早くから園に来てくださって準備をしてくれました。でも、みんながうるさくすると、お兄さんやお姉さんは怒って帰ってしまいます。おもしろいときは笑ってもいいですが、あとは静かにしましょう。お口にチャック。いいですか、最後までがんばってみてください。さあ、お兄さんやお姉さんの準備ができたかどうか、みんな聞いてみましょう。では、一緒に。もういいかい」

「お兄さん、お姉さん」

使って欲しくない表現の一つ。よく言われるし、他意がないのもわかるが、なんとも納まりが悪い。「劇団員全員、三十歳を過ぎていて、お兄さん、お姉さんと呼ばれる年頃ではありませんから、劇団員とか、劇団の方とか言ってください」と頼む。すると「いえ、いえ、まだお若くてお姉さんで十分通り

ますよ」などとお世辞を言われたりする。

「そういうことではなくて、おじさんやおばさんが演っているということに意味があるのです。できれば、おじさんやおばさんになっても演り続けていたのです」とくいきがる。大のおとなが本気で演っているということをむしろきちんと伝えたいと思う。

考えすぎてしょうか

日本児童演劇団協議会のアンケート調査によると、「三十四歳」で退団するケースが多いらしい。三十四歳と言えは十年以上の実績があり、劇団としては「脂がのって」きてようやく「使える」までになってきたと言えるところ。一方個人としては、自分よりひとまわり下の新人をむかえたりして、必ずしも自分が若くないことを知る年齢でもある。ふと周囲の同世代の人と我が身を比べ、このままこうしていいのだろうか、結婚は？ 出産は？ 老後

は？ と、来し方行く末についてしみじみ考える。とりわけ、経済生活に及ぶともはや平静ではいられない。

我が国で、プロと称している劇団は百二十〜百五十と言われているが、劇団の収入だけで生活できている劇団員はどのくらいいるのだろうか。ちなみにひぼぼたあむの場合は、専門的人形劇団とは自信をもって言える。しかし職業的人形劇団と言うには経済的基盤が弱すぎると言わざるを得ない。

「せっかくここまで一緒にやってきたのに」——双方でそう思い合いなから、経済的理由でやめていく劇団員を私たちはとめられない。こうした才能の流出にどこかで歯止めをかけない限り、我が国の児童演劇の質の向上など望めない。

一緒に考えてください

さらにこのところ、週休二日制の一部導入により、学校での演劇教室が、行事の精選ということ

とりやめになるところが増えていくと聞く。同協議会の調査では、小学校で三割減、中学校で五割減とすることだ。学校公演を活動基盤としている劇団の場合、存続そのものがあやうくなっている。これは、それぞれの劇団の問題であると同時に、観客の問題でもあると思うがいかなものだろう。

「自然淘汰」などというおそろしい表現が、同業者の中からも聞こえてくる。しかし、売れている作品、劇団が、そのままイコール残ってほしい作品、劇団なのかどうか。子育てに関わる全ての方々に「どうぞどうぞ、児童劇と児童劇団に関心をもってください」と呼びかけたい。「ソシテ誰モイナクナッタ」などということがないように。

お兄さん、お姉さんと呼ばれてふさわしい年齢の人々の「若気のいたり」にのっかってかろうじて成り立っているような我が国の児童劇の現状をきちんと受けとめたい。

言って欲しいこと

「席を立て、前へ出て来ないこと」

理由は簡単。危険だからということと、一緒に観ている人の邪魔になるからだ。ついでに言えば、ついでの後ろにいる私たちの精神安定上もよくない。舞台前面に垂らした幕をめくられたら、私たちは丸見えになってしまう。スピーカーやライトスタンドが倒れたら大事故になる可能性もある。

子どもの側から言えば、嬉しくて、楽しくて、あるいは人形との一体感が欲しくて、気がついてみたらとび出して来たところか。その嬉々とした高まりがみてとれるために、おとなの方でも対応が遅れる。それどころか「うちの子はのっ、舞台の方まで出て行っちゃったの」などと手離して喜ばれたりするむきもある。しかしこれは困る。観客参加型の人形劇ではないのだから。

いったんとび出してきた子どもを、再び客席へ戻すのは骨が折れる。本人の高揚した気分をつぶさ

ず、周囲への迷惑も最小限にととなるとなおのこと。できれば客席をつくる段階から工夫がほしい。ひぼぼたあむの場合は、年長児を前列に、年少児は後列に、乳児がいるときは保育者とともに出入口の近くに席を占めてもらう。訳を話してわかる子どもには言葉で、そうではない子どもにはさりげなく条件を整えることで、みんな楽しんでくれることを保障し合いたい。

たまに、年中児から不満の声が出ることもある。「みんなも年長さんになったら一番前で観られるようになるよ」と言うことにしている。「早く年長さんになりたいね」と、楽しみを後のばしにしてあげることがあっている。

静かにしなさいとは言わないで

とくに「シート」と言うのをやめてほしい。あれは、うるさい。他人の行動を静止するのだからパワーだ。もしかすると本人の想像以上に響き渡る。入場するときから「シート」と言い続けるところも

ある。「静かにしなさいとおっしゃらないで結構です」、そう伝えるために客席へ出ていくと、保育者ではなく子ども同士で言い合っていたりするからとまどう。ピアノに合わせて整然と一列に並んで入ってくることもある。静かなのはありがたいが少々不自然な印象をもつ。

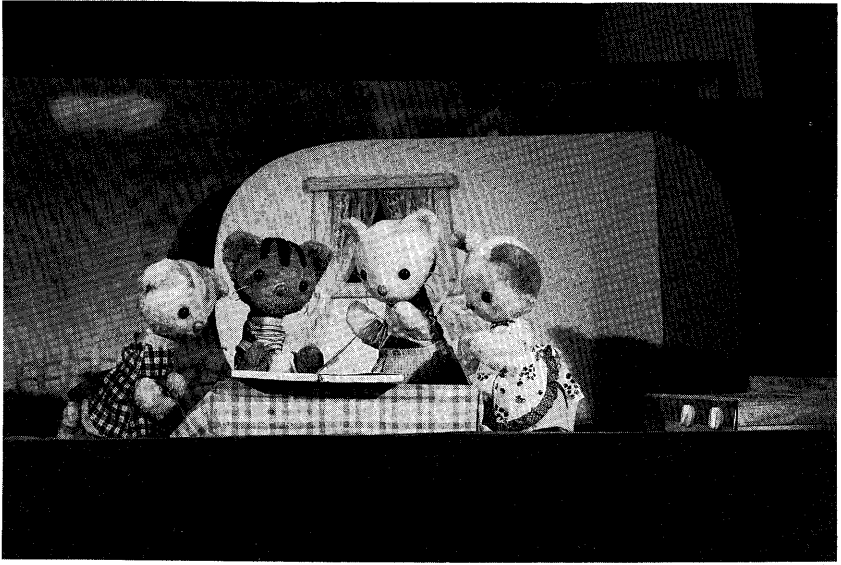
「あ、ここはどこだ」

「ほくたちの部屋じゃないみたい」

「今日は、何の人形劇かなあ」

期待感を口にしなから入場してくれる方がうれしい。私たちもワクワクしてくる。楽しい気持ちは伝染する。

音楽が鳴り出しただけでキャーッ。室内の照明がおちるとワーッ。幕が開き出すと自然におこる拍手。観劇を自分から楽しもうとするパワーにほっとする。そのとき「シート、静かにノ」では野暮ではないか。危険がない限り、保育者には静観してほしい。というよりむしろ、子どもたちと一緒に心をは



▲「すえっこねこのルウ」

ずませて欲しい。保育者と観客の二つの立場を自在に行ったり来たりできる保育者はすてきた。くれぐれも、私たちへの気遣いから子どもたちを叱るのは止めて欲しい。子どもたちはどんなにはしゃいでいても、観るべきところは観、聴くべきところは聴くものだ。いい劇とはそうなるように創られている。もしそうではなかったら、それはそれだけの劇でありそれだけの出会いだったということ。もちろん適正な人数での観劇であり、子どもの生理を考えた開演時間、上演時間である場合には——と言わなければならぬが。

泣いてしまった子どもは外へ

「泣くのを止めなさい。外へ出る？ 嫌なら泣き止みなさい。止めなさいって言ってるでしょ。止められる？」

何がきっかけで泣き出したのか、ついたての後ろにいる私にはよくわからない。でも、うるさい。泣

き声ではない。延々と続くおとなの声が耳障りなのだ。

「ちゃんとみるって約束したでしょ。みるの、みないの」

無理に押し殺した声は、実に人の気をひくものだ。ときには舞台の上のセリフのやりとりよりも注意をひく。

「他の方にご迷惑でしょ。泣くのを止めなさいいったら……」

ここまできてようやく、外へ連れ出すことが一番の良策だと気がつく場合と、一段と説得（説教？）が長引く場合とがある。人目が説得に拍車をかけるという感じだ。

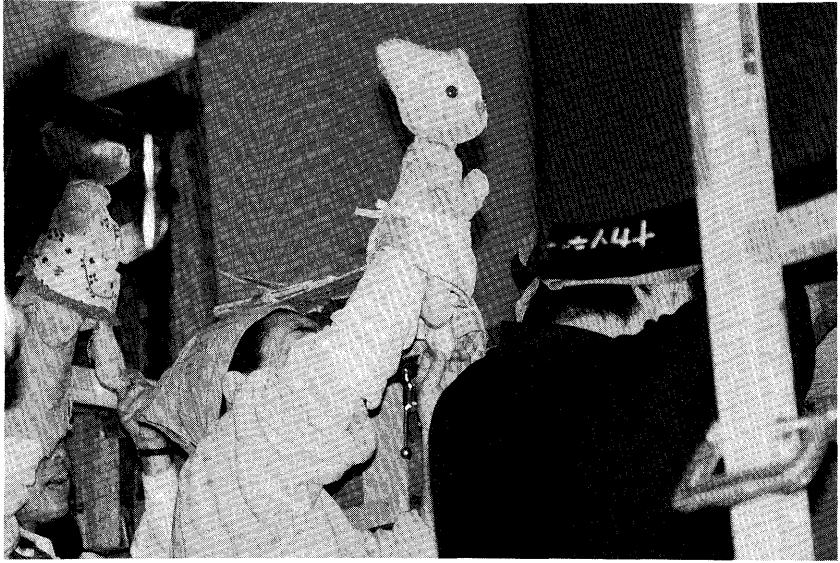
彼（あるいは彼女）は何をしているのか。子どもへのしつけか。それともしつけをしているという世間へのアリバイ作りか。つまり保育者（あるいは親）のメンツ優先と言えはいいすぎか。どちらにしても「他の方にご迷惑でしょ」と言いながら、他の

方のことは視野には入っていない。他の方へのご迷惑を最優先させるのなら、まず泣き止ませること。

どうやって。それは——、大丈夫と声をかける、手を握る、とりあわない、抱きよせる……などなど。原因がいろいろなのだから泣き止ませ方もいろいろ。臨機応変。個別具体的。とりわけ、こわくて泣いた場合は「こわかったねえ」と丸ごと受けとめる。つまりあやす。はじくより吸収する方がよいような気がする。少なくとも説教はいらない。それでもダメならとりあえず外へ連れ出すこと。落ち着くのを待つてまた戻ればいい。劇場をうすつべらなしつけの場にしないでと言いたくなるときがある。

子どもは思いのほか恐がりです

室内の照明が消えただけで泣き出す子どもがいる。単に暗やみが怖いのか、それとも以前に怖い思いをしたのか。劇場仕立てになった部屋に入ることさえ嫌がる子どもいる。私事で恐縮だが、我がむすこ



▲「すえっこねこのルウ」—— ついたての後ろでは

の例を。

むすこが小学校一年のとき、学童保育所で映画に行った。原爆がテーマのコミックをアニメーション化したもの。平和思想に貫ぬかれた前評判の高い作品であった。ところが帰宅したむすこの表情が暗い。夕飯もすまない様子。私と二人で入浴し、いつものようにホースの先に口をあて水を飲もうとしたむすこが、突然しゃくりあげた。

「あの子たちは、あの子たちは水も飲めずに死んだんだ」

ようやく眠りについてからも何度もうなされ、ビクンと起き上ったりする。

「よほど怖かったんだね」

夫と相談して、翌日郊外の大きなプールへ連れ出した。明るい太陽の下で思いきり遊んだら、少しは元気をとり戻すかしら、と。ところがむすこは、流れるプールを目にしたとたん「あの日と、あの日とおんなじだ」と叫び、座り込んでしまった。浮い



たり沈んだりしながら流れてくる人々の様子が、原爆投下のその日、水を求めて川にとびこんだ被爆者の姿とダブってみえてしまったのだろう。

「大丈夫、二度とあんなことがおこらないようにって父さんも、母さんも仕事をしているんだから……」

なぐさめの言葉がみつからない。また、私たちがなぐさめてすむものでもない。キミはこれからどう生きるのか、映画は、子ども、おとなを問わず、観客一人ひとりに等しく問題をなげかけ、むすこはそれを全身で受けとめた。そういうことだ。しかし、その映画の主要なテーマを受けとめきれず、ただただ残酷なシーンのみが印象に残ってしまったのではないか。そういう意味では、私のむすこには少々早すぎたとは言えないだろうか。映画や演劇をある程度は受けとめたい。毒にも薬にもなるものだ。その影響を思うと、子どもに何を観せるか、とりわけ「どの時期に」という問題には慎重でありたい。やはり、観客年齢に上限はないが下限はあると確信する。

### 観劇会の作品を選ぶとき

ぜび、下見をして欲しい。観劇が保育の一環として取り組まれるとき、子どもは逃げられない。怖がりの子どももいるのだ。事前にわかっていればサポートもできる。

また、我が国の現状では、保護者に関心がない限り、園や学校での観劇が唯一の機会であることが多い。その重さをあらためて思う。だからこそ、ぜび下見を！ 下見と称してたくさんの作品に出合っほしいと申しあげたい。保育者として作品の選択眼を拓く——などという目先のことではなくて、演劇のテーマは、まさに人間そのものだから。子育てに関わる全ての方々に、もっと演劇に触れていただきたい。ほかでもない、あなたご自身のために！

(ひぼぼたあむ)